B 年特定17　マルコ7章1―8・14―15・21―23節

［直訳］

1 そして　集まる　彼のもとに
　ファリサイ派の人々は　そして　律法学者のある者たちが
　来て　エルサレムから。
2 そして　見て　彼の弟子のある者たちを　次のことを
　世俗の手で、　これは洗っていないこと、　彼らが食べる　パンを
3 ――なぜならファリサイ派の人々は　そして　すべてのユダヤ人たちは
　もし　こぶしで　彼らは洗わないなら　手を
　彼らは食べない、
　守りつつ　言い伝えを　昔の人々の
4 そして　広場から　もし　彼らは洗浄しないなら
　彼らは食べない、
　そして　他の　多くのことが　ある
　ところの　彼らが受け継いだ　守るために、
　洗浄　杯の　そして　鉢の　そして銅の器の　［そして　寝台の］――
5 そして　尋ねる　彼に　ファリサイ派の人々は　そして　律法学者たちは、
　「何のために
　歩まない　あなたの弟子たちは　昔の人々の言い伝えに従って、
　そうではなく　世俗の手で　彼らは食べる　パンを。」
6 だが彼は　言った　彼らに、
　「適切に　預言した　イザヤは　あなたたち偽善者について、
　ように　書かれている　［次のことが］
　『この　民は　唇で　私を　敬う、
　だが彼らの心は　遠くに　離れている　私から。
7 だがむなしく　彼らは礼拝する　私を
　教えつつ　教えを　人間たちの指図を。』
8 捨てて　神の戒めを
　あなたたちは守っている　人間たちの言い伝えを。」
14 そして　呼び寄せて　再び　群衆を　彼は言っていた　彼らに、
　「あなたたちは聞きなさい　私に　皆が　そして　あなたたちは悟りなさい。
15 何もない　人間の外から　入りつつ　彼の中へ
　ところのものは　汚すことができる　彼を、
　そうではなく　人間から出るものが　ある　人間を汚すもので。
21 なぜなら内から　人間たちの心から　悪い思いが　出る、
　ふしだらなこと、　盗み、　殺害、
22 姦淫、　貪欲、　悪意、　詐欺、　好色、　悪い目、　中傷、　傲慢、　無分別。
23 すべての　これらの　悪が　中から　出る　そして　それが汚す　人間を。」

［新共同訳］

1 ファリサイ派の人々と数人の律法学者たちが、エルサレムから来て、イエスのもとに集まった。2 そして、イエスの弟子たちの中に汚れた手、つまり洗わない手で食事をする者がいるのを見た。3 ――ファリサイ派の人々をはじめユダヤ人は皆、昔の人の言い伝えを固く守って、念入りに手を洗ってからでないと食事をせず、4 また、市場から帰ったときには、身を清めてからでないと食事をしない。そのほか、杯、鉢、銅の器や寝台を洗うことなど、昔から受け継いで固く守っていることがたくさんある。――5 そこで、ファリサイ派の人々と律法学者たちが尋ねた。「なぜ、あなたの弟子たちは昔の人の言い伝えに従って歩まず、汚れた手で食事をするのですか。」6 イエスは言われた。「イザヤは、あなたたちのような偽善者のことを見事に預言したものだ。彼はこう書いている。

『この民は口先ではわたしを敬うが、
その心はわたしから遠く離れている。
7 人間の戒めを教えとしておしえ、
むなしくわたしをあがめている。』

8 あなたたちは神の掟を捨てて、人間の言い伝えを固く守っている。」

14 それから、イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた。「皆、わたしの言うことを聞いて悟りなさい。15 外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚すのである。」

21 中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。みだらな行い、盗み、殺意、22 姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など、23 これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである。」

①構成

ⓐ 1―5 節

2 節と 5 節に「(弟子たちが) 世俗の手でパンを食べる」が繰り返されている。2 節で「世俗の」は「洗っていない」の意味だと解説した後に、3―4 節で「洗う」と「洗浄する・洗浄」を合計三回繰り返し、洗うこと、つまり「世俗の」ものでないことがファリサイ派的な生き方の要点であることを示している。なぜなら、3・5 節にあるように、「昔の人々の言い伝えを守る」ことが、彼らの根本姿勢であったからである。

ⓑ 6―8 節

イエスはイザヤからの引用（6―7 節）を行った後に、ファリサイ派の根本姿勢を表す表現「言い伝えを守っている」を借用している（8 節）。しかし、イエスは「昔の人々の言い伝え」を「人間たちの言い伝え」に変え、しかも「神の戒めを捨てて」を前に置くことによって、ファリサイ派の生き方は人間たちが勝手に作り上げた生き方であって、神の望むものではないと断言する。

ⓒ 14―15・21―23 節

この段落には「汚す」が三度使われているが、この語（コイノオー）は 1―5 節で「世俗の」と直訳した語（コイノス）の動詞形である。ファリサイ派は汚れを「世俗」から来ると考え、「洗

う」ことを重視する。しかし、イエスは人を「汚す」ものは外からではなく、内から来ると教える。イエスは汚れを祭儀的にではなく倫理的に捉えている。

②ファリサイ派の問い（1―5 節）

ⓐ当時のユダヤ教の課題は、律法と現実社会との間をいかに調和させるか、ということであった。旧約聖書に書かれた律法は、過去のはるかに単純な社会を前提としているが、時代と共に社会も変化し、そのままでは現実社会に適用できなくなっていた。

ⓑこのような現実を前に、エッセネ派は自分たちの生活を単純な律法に合わせようと考え、複雑化した文明を捨て、荒れ野に出て行った。一方、サドカイ派と呼ばれるグループは、社会の上層階級から成り立つ保守的なグループであり、日のあたる場所にいる彼らには、時代の変化もさほど深刻なものとは見えなかった。そこで、彼らは書かれた律法だけで充分であり、それ以上の対応を必要とは考えていなかった。

ⓒこれに対して、ファリサイ派はエッセネ派と同じように、書かれた律法と現実との調和が必要だと強く自覚していた。だが、エッセネ派とは違って、律法を現実に適合させようとしたのである。というのは、神が律法を与えたからには、どのような状況にも適合できるようにと配慮されているに違いないと信じたからである。彼らにとっては、律法を現実社会に適合させるための解釈がきわめて重要であった。こうして、過去からの解釈が「昔の人々の言い伝え」として、書かれた律法と同等の権威を持ったのである。ファリサイ派は「言い伝え」を律法と同じように守ろうとしたグループである。この点で書かれた律法だけを重視するサドカイ派とは違っていた。

ⓓイエスの弟子たちが手を洗わずに食事をしたのを見たとき、「言い伝え」に抵触するとファリサイ派が非難したのは、「言い伝え」を守るのに熱心だったからである。彼らが「世俗の手（洗わない手）」での食事を禁じたのは、衛生上の清潔さを好んだからではない。戒めを大事にした彼らは、祭儀のための清浄規定を日常生活の全領域に広げ、食事の前や市場から帰ったときも、手を清めねばならないと考えたからである。

ⓔ「世俗の」と直訳した語は形容詞コイノスである。この語は文字通りには「共通の・共有の・共同の」を意味するが、そこから「普段の・世俗の」を表すようになり、それにユダヤ教の聖俗概念が加わり「神聖さを欠いて汚れた」の意味でも使われる。世俗に属するものは祭儀に必要な神聖さを欠いて「汚れている」という意味合いはギリシア語本来の意味ではないため、2 節ではこの語を説明して「洗っていない」と言い換えている。

ⓕこの段落では「洗っていない」「彼らは洗う」「彼らは洗浄する」「洗浄」というように、洗うことを意味する言葉が繰り返されている。ファリサイ派の人々の関心は、神の前に清さを保つために「洗う」ことにあった。「世俗の手」で食事を取るイエスの弟子たちは、神との関わりをおろそかにする不謹慎な者と彼らには映っていたのである。

ⓖ3 節の「こぶしで洗う」の意味は良く分かっていない。「片方の手の平を他の手の握りこぶしで洗う」「手首まで洗う」「手の肘までを洗う」などいろいろに推測されている。どのような洗い方を述べているのかはともかく、文脈から考え、「ていねいに、しっかり洗う」の意味であるのは確かだろう。

ⓗ動詞形コイノオーは、新約聖書ではもっぱら「汚す」を意味する。15・23 節でも「不浄にする・神聖さを汚す」の意味で用いられている。外から人の体に入るものは人を「汚さず」、人の中か

ら出てくるものが人を「汚す」（15・18・20・23節）。この他、「（祭儀的に）汚れていると見なす・断言する」の意味でも用いられる（使一〇15、一一9）。

ⓘ元来は「共通の」を意味するコイノスは、ファリサイ派にとっては「汚れた」という意味に収斂する。コイノスと同じ語根の名詞コイノーニアーは「交わり」を意味し、使徒言行録では「財産を共有する信徒同士の交わり」を表し、パウロでは「信仰に基づくキリストとの交わり」を表す。コイノスとコイノーニアーは同じ語根の言葉であるが、ファリサイ派には「共通の→世俗の→汚れた」となり、キリストを信じる者には「霊における交わり」を表す言葉になっている。キリストの霊が「共通の」基盤となり、交わりを可能にする。

③言い伝えについて（6―8節）

ⓐファリサイ派と律法学者はイザヤ書が預言した偽善者だとイエスは言う。なぜなら、彼らは「唇では神を敬うが、「心」は神から離れており、その礼拝は「むなしく」なっている。彼らは「人間たちの」指図を教えと称して教えている。彼らは尊敬すべき「昔の人々の言い伝え」を守っているが、イエスはそれを「人間たちの言い伝え」にすぎないと断言する。彼らは神の教えを捨て、「人間たちの言い伝え」に固執することによって、神の戒めの根本からそれている。

④汚れについて（14―15・21―23節）

ⓐ14―15節ではイエスの相手は群衆に替わる。イエスは「人間を汚すものは、人間の外からではなく、人間から出る」と教えて、清浄さを失わせるのは人の外にある事物ではなく、心に巣くう悪意だと述べる。食べ物を含め事物は人間を汚しはしない。悪意から出る悪い行いが人を汚す。イエスは清浄の問題を祭儀的な観点からではなく、人間の心のあり方へと深めている。

ⓑ21―23節では群衆と別れて家に入った後で、群衆に語った言葉の意味を尋ねた弟子にイエスが答えている。弟子や聴衆の無理解というテーマは福音書前半を一貫して流れている。

⑤神の戒めに聞き従う

ⓐ汚れは「世俗」から来ると考えたファリサイ派と律法学者は、彼らが大事にする「昔の人々の言い伝え」に従って、手だけでなく、食べ物も器も「洗い」、「洗浄する」。彼らは神の戒めを無視しようなどとはゆめゆめ思わない。戒めを完璧に守るために、細則を作り、神の前に身を清く保とうと努力する。

ⓑ戒めを守るために細則が生み出される。細則によって戒めの守り方を固定化すれば、それを守りさえすればよいという安心感を持つことができるからである。しかし、その細則はいつの間にか一人歩きを始める。細則を守っていることがその人に自信を与え、戒めを通して語る神に聞くことをしなくなる。そうなれば、それは「人間の言い伝え」にすぎないものとなる。

ⓒファリサイ派と律法学者たちは、イエスの弟子が「世俗の、汚れた手」で食事をするのを見て、「言い伝え」を守っていないことを指摘する。この時点で彼らの「言い伝え」は人を裁くための規則となり、彼らは神の前に清くありたいと願いながら、すべての人を救いに招く神の思いから遠く離れた者となる。律法（トーラー）は「歩むべき道を指し示すために神が恵みを込めて放った指示」である。神の戒めを守るとは、細則によって行動を固定するのではなく、神と共に歩む道を求めて、神の言葉を聞き続けることである。